

臨床

超高齢患者における循環器疾患の治療目標

Goal of cardiovascular disease in super-elderly patients by the treatment

新潟南病院 リハビリテーション科*, 同内科**, 同整形外科***

統括顧問 和泉 徹*, ** Izumi Tohru

阿部 暁** Abe Satoru

上原彰史** Uehara Akifumi

渡部 裕** Watanabe Hiroshi

和泉由貴* Izumi Yuki

鈴木順夫*** Suzuki Yorio

小幡裕明*, ** Obata Hiroaki

KEY WORD

心不全, フレイル, DOPPO, セルフケア, 第二のシナリオ

はじめに

わが国は紛れもない超高齢社会に突入している。平成27(2015)年10月1日現在、総人口は1億2,711万人、その26.7%の3,392万人が65歳以上の高齢者である¹⁾。世界保健機構(WHO)による超高齢社会の定義、高齢化比率分岐点21%を優に超えている。統計上は、2007年に超高齢社会に突入したと考えられる。それ以降、どの先進国も経験したことのないスピードとサイズで超高齢化の道を邁進している。しかも少子・超高齢社会である。専門家の一致した見解によれば、この潮流は

2050年頃までは変わらない²⁾。賢い国家的決断と行動を伴わなければ高齢化比率はやがて40%の大台を超え、限界値である50%に迫るであろう。ホモサピエンスが抱えた有史以来の新たな試練、超高齢人間のあり様が問われている。人生設計50年どころの話ではない。いつの間にか70年を超え、ついには90年人生設計が公式の場で真摯に論議されている³⁾。しかしながら、今超高齢期を迎えている日本人が生まれた1930年頃はいかがであったらうか。今日の長命社会の到来を予見していたであらうか。兆候は見出されない。今超高齢を迎えられている日本人は人生設計

50年の社会的枠組みの中で生まれ、育まれ、戦禍にまみれ、戦後復興と日本の隆盛を担い、ある種の安堵感と満足感をもって第一線を退かれた。その過程で、あれよあれよという間に少子・超高齢化の波に飲み込まれ、押し流されている。まさに“想定外の展開”である。来る2025年にはこの人口問題の齟齬、不透明感を何とか下支えしてきた団塊世代が次々と75歳を超える。そして大量に介護される側に回る。その人口学的黄昏感が目前に迫って、日本人は初めて事の重大さに気付いた。そして深刻に騒ぎ出した。“日本が人類の最難解問題に曝されている。トッ